



みんなが支えあい、だれもが住みやすいまちに ～白い杖を持った人を見かけたら～

まちに出ると、白い杖を持って歩く人を見かけることがあります。目が不自由な人は、外出するとき周りの様子を知るため、また、目が不自由であることを周りの人に知ってもらうため、法律で定められた白い杖を持っています。周りの人たちと少し様子が違って見えるかもしれませんが、決して特別な人ではありません。白い杖を持った人を見かけたらどうすればよいのでしょうか。私たちは障がいのある人のことを考える機会があまりないかもしれません。今月号では、視覚障がいのある人のことを知り、支えあってくらすまちについて考えます。

まちにはしつけられた障がい

目の不自由な人のことを、視覚障がい者と呼んでいます。視覚障がい者と言っても、全く見えない人から光を感じる人、メガネなどで矯正しても視力の弱い人、見える範囲の狭い人など様々です。一人で外出できる人も大勢います。しかし、一人で歩くにはまちは危険がたくさんあります。歩道に飛び出して設置している看板や植木、点字ブロックの上に置いてある自転車や荷物、はつきり見えていれば、それらを避けて通ればそれで済むかもしれませんが、しかし、見えない人はふつかつてはじめて気付きます。状況



▲点字ブロック上に駐車された自動車

場所によっては命に関わる危険も考えられます。私たちが気にならないものでも、目が不自由な人にとっては大きな障害となります。

まずは声をかけて

目が不自由でも一人で外出できる人はいますが、目の代わりになるものは必要です。目の代わりになるものが白い杖で、ここから伝わる感触で周りの状況を判断して歩きます。そして、それを積み重ねて目的地へ行きます。しかし杖だけでは目の前の障害物は把握できても、その先の状況までは分かりません。また、わずかな判断のずれで自分がある場所が分からなくなるときもあります。

白い杖を持った人を見かけたらどうすればよいでしょうか。目の不自由な人は、街中で困っていても、誰がどこにいるか、わからないために自分から声をかけにくいことが困難です。まず、「どちらへ行かれますか」とか「お手伝いしましょうか」など声をかけ、その人の状況を知ることが大切です。

目が不自由という現実で生活する

目が不自由な人はどのような思いで生活されているのでしょうか、市内にお住まいの視覚障がい者の方にお話を聞きました。

●お互い遠慮のない世の中に自分自身のためにいる人々と進んで付き合いをしようと思っても、どうしても遠慮してしまいます。以前健常者の人と一緒にいたとき、迷惑をかけると思ってトイレを言い出せ

自立に向かおう

市内には、自分たちの力で社会へ出ることを目的に、視覚障がい者の方でつくられた団体があります。代表の中西さんにお話を聞きました。

甲賀市視覚障害者福祉協会
会長 中西 勇さん



視覚障がい者が住みやすくなるには自分たちが自身の努力が欠かせ

ません。自分たちでできることはする、そして社会貢献する。そんな思いから、単なる交流だけでなく、点字や歩行の訓練など、あくまで視覚障がい者の自立を目的とした活動を行っています。

目が不自由だと、まず不便なのは移動することです。このため、どうしても家に閉じこもりがちになります。市内には約260名の視覚障がい者がいますが、外に出ることができず、一人で苦しんでいる人が多くいます。外に出るということは、視覚障がい者に



▲点字の読み書きの訓練

とっては非常に勇気のいることです。視覚障がい者も自立し、またこういふ現実を皆さんに知ってもらい、視覚障がい者が安心して外出できるようなまちになることを願っています。

少しの勇気と思いやりで心のバリアフリーを

白い杖を持った人を見かけた時、声をかけなくても大丈夫だろう、誰かが声をかけるだろう、とそのまま横を通り過ぎることがあるかもしれません。普段何気なくするあいさつも、目の不自由な人の前ではそのまま通り過ぎるかもしれません。しかし、目が不自由な人にとっては、そんな何気ない一言も大きな支えになるものはありません。私たちの目が、その人たちの目になります。

目の不自由な人の立場を考えたとき、点字ブロックや音声信号などの施設のバリアフリーが思い浮かびますが、私たちがもっと身近にでき、また、私たちにしかできないバリアフリーもあります。いろいろな人の立場にたって行動する。この積み重ねが誰もが住みやすいまちにつながります。

白い杖を持った人を見かけたら

- まず声をかけ、状況を知ります。そして、必要な部分だけを援助します。
- 誘導するときは、白い杖の反対側にたち、肘の少し上を軽く持ってもらい、半歩前を歩きます。また、道を聞かれたときは、「あっち」「こっち」とか、指をさしても見えないので判りません。右とか左、何歩、何メートルというように具体的に話します。階段の手前では一度止まって「上り階段です」と声をかけてから上がります。

